



## 災害と薬剤師の役割について考える

谷口美保子

日本中で地震をはじめ、水害などの大きな自然災害が起こっています。国内災害を想定するときに、阪神淡路大震災で薬剤師はどのような活動をしたかが思い出されます。1995年1月17日、私は兵庫県神戸市灘区で震災を経験しました。来年1月に、阪神淡路大震災後12年を迎えます。被災地での薬剤師という立場から災害と薬剤師の役割について考えてみたいと思います。

「災害と薬剤師の役割」というと、災害時のボランティア活動が取り上げられることが多いように感じます。被災地の外からボランティアとして被災地に入り、寝泊りして、活動したことが報道され、話題とされるようです。阪神淡路大震災をはじめ、新潟県中越地震などでも、多くの薬剤師がボランティアとして被災地で活躍されました。ボランティア活動に参加された薬剤師の方々は、自らの仕事を休み、日常の生活を犠牲にして、被災地の人々のためにと熱い思いで活動されたことと思います。

しかし一方で災害を現地で経験した薬剤師は、医療職としての責任とともに、他方では自らも被災者であるという生活上の困難をも抱えながら活動を続けていました。いつ終わるかも分からず、生活のめどもたたない中で、薬剤師として精いっぱい活動し続け、休むことが許されない毎日が続きました。水もなく、電気、ガスも止まった日常生活の中で、薬剤師としての業務を全うしなければならないという状況に置かれました。また、薬局自体が被災したことにより、今までの業務が行えなくなったり、経営難のため、活動が困難になることもありました。当座の混乱が落ち着くと、被災地の復興の歩みを見守り、その地域の被災者の健康を考えなが

ら、そこで起こる問題と常に直面して薬剤師の業務を続けます。復興の歩みは、1年や2年ではすまない場合が多く、時には、身近な家族や友人、患者さんがケガをしたり、亡くなるというつらさを抱えて仕事や活動を続けることになります。

災害の時に薬剤師はどのようなことができるのか、顔の見える薬剤師の活動とは何なのでしょうか。私は被災地に出かけて行き、ボランティア活動をするだけが、災害時の薬剤師の活動ではないと考えています。本来必要なのは、災害が起こった時に、被災地の薬剤師が医療職として動ける体制を作ることではないでしょうか。確かに動きの取れない中で、避難所や救護所でボランティア薬剤師として関わることも災害当初は必要かと思います。しかし、いずれは、被災地の薬剤師が、被災地で本当に必要とされる活動を、その職能を発揮してやり続けられることが必要であり、それをバックアップすることこそが、必要なのではないかと思います。

阪神淡路大震災の後も、鳥取県西部地震や新潟県中越地震など大きな地震は起こっています。また、集中豪雨などで大きな被害が出ている地も多く、全国各地でこれからも多くの災害が発生する可能性があると思われます。今後、近畿圏では南海大地震が起こると予想されています。その時に、被災地の薬剤師はどう動けるのか、そのためには何が必要か、被災地の復興までどのように支援していくのか、その点を今から考えることこそ必要ではないでしょうか。

被災地の薬剤師が疲れきっている時に、ボランティアに入る薬剤師は被災地で活動し続ける薬剤師の心のケアができる力がほしいと思います。心のケアといっても大変なことではなく、ねぎらいの言葉をかけ、頑張っていることを共感しあう姿勢がほしいと思います。被災地の薬剤師は今までにない経験を、精神的に不安定になっていることが多く、それを支える形で、支援していくことが必要なのではないのでしょうか。

また、それぞれの被災地で起こった問題点を丁寧にまとめ、被災地の薬剤師の意見や経験を整理する視点こそが、次の災害のときに何を準備する必要があるかを考えさせる資料になると思います。災害時に近隣の都道府県の薬剤師は何ができるのか、そのネットワークを作ることこそ、今のうちにやっておかなければならないことではないでしょうか。ボランティアとして、薬局や薬剤師を訪問して、悩みやつらさを聞くボランティア薬剤師も必要なのではないのでしょうか。被災地での薬剤師のボランティア活動は、被災地での薬の管理や救護所での調剤などハードな面だけにとどまらず、被災者の心理を理解し、復興していく道のりの中で地域の薬剤師が動けるようにと援助する姿勢が必要だと思います。

阪神淡路大震災からもうすぐ12年を迎えようとしています。街が新しくなり復興したと見える裏側で、まだまだ震災の傷跡を抱えた多くの市民が日々の生活を送っています。私自身も震災を通じて失ったもの、またそれを乗り越えることによって得たものがあります。地震は過去のものではなく、被災した者にとって、今もその時の状況やつらさをはっきりと思い出すことのできる出来事です。被災地で共に生活し、薬剤師としての活動をしながら、被災者の気持ちに寄り添える薬剤師こそが地域の被災者にとって必要とされる薬剤師ではないかと考えています。

(たにぐち・みほこ 神戸薬科大学臨床薬学研究室)